



## Be creative !

# 持続する志を胸に—第63回卒業式を終えて

2月28日、好天に恵まれる中、第63回卒業証書授与式が執り行われました。残念ながら、在校生の皆さんは今年度も参加することはできませんでした。今月号の「校長室だより」では、卒業生代表の言葉と校長の式辞を紹介します。

## 将来の夢に厚みを加えた3年間 卒業生代表 水野真帆

今から3年前、目に見えないウイルスに対する恐怖と不安、これから始まる3年間への期待を胸に私は、日本福祉大学付属高等学校の正門をくぐりました。入学した私たちを待ち受けていたのは2ヶ月の休校期間。部活動も例年より2ヶ月遅れての入部となりました。消えた試合、縮小された学校行事、コロナウイルスの影響を受け様々なことに制限がかかりました。想像していた高校生活とはかけ離れた生活に、はじめは戸惑いも感じましたが、それでも私の3年間は決して暗いことばかりではありませんでした。和太鼓部に入部し、中学の頃とは比べ物にならない程の練習をする日々。部長を務めるようになってからはハードな練習に加えプレッシャーと責任がのしかかる毎日でした。辞めたいと何度も思ったにもかかわらず続けることが出来たのは信頼出来る大切な仲間と出会えたからです。この仲間となら大きな目標も叶えられるかもしれない。どうせならいけるところまでいってみよう。そう思えたから、私は今ここに立てているのだと思います。大切な仲間と共に全国大会で最優秀賞をとることを目標に練習し日本一に輝いたあの夏は3年間で一番の思い出になりました。また、東日本大震災被災地へ演奏訪問した際に何度もありがとうと言われたこと。震災遺構を実際に見学し被災者の方からお話を聞いたことが印象に残っています。また、演奏訪問を通して災害看護の重要性を感じ、将来の夢である看護師という職業についても真剣に考えることができました。4月からは千葉県で寮生活です。看護師になるために新たな挑戦が始まります。



最後になりますが、校長先生をはじめ、諸先生方、時には厳しく時には優しく私たちを指導して頂きありがとうございました。朝早くから起きてお弁当を作ってくれた母、どんなにきつい練習でもずっと笑わせてくれた仲間、部活以外で仲良くしてくれた友人達。これまで私が支えてもらったように、これからは私が誰かを支えられるようになっていきます。全ての人へ心から感謝し、卒業生代表の言葉とさせていただきます。

## それでも夢を叶える 卒業生代表 佐々颯一

私は小学生の頃から音楽や楽器が大好きで、高校での吹奏楽部の活動を通して、さらに自分の楽器の演奏技術を向上させようという思いを持って、日本福祉大学付属高等学校に入学をしました。そして、大きな大会で結果を残す喜びや、仲間と音楽を作り上げる楽しさ、そしてより美しく楽器を演奏する技術を身に付け、知識を深め、音楽の学びを深めてきました。ですがそれ以上に、自分よりレベルの高い演奏をする仲間がいることで、プロの楽器奏者になるという夢の難しさを思い知らされました。夢を叶えられるのは、ほんの一握りなのだ。また、「努力は裏切らない」「いつかかならずできる」という言葉を信じられなくなる時もありました。しかし、「じゃあ諦める？」と心の中で自分に問いかけた時、「それは絶対に嫌だ」と真っ先に自分自身に返答をしている自分がいたのです。このとき私はそれでも夢を叶えたいという自分の強い思いを確かめることができました。

自分の非力さや甘さを日々痛感する中で、これから夢を叶えるために、自分の道を進めていく時、諦めない気持ちを持ち続ける大切さを仲間と過ごしていく中で学ぶことができました。決して一人では気づくことはできないことでした。

本日をもって高校生活は終わります。日本福祉大学付属高等学校での学びが終わります。ですが、学ぶこと自体、終わることはありません。仲間と過ごした3年間の日々は、長く心に残ると思います。その思いは過去にすぎるためのものではなく、懐かしむものでもなく、前に進んでいくためのものです。この3年間の学び、様々な経験を糧にして、これからの時間を今までよりもっと素晴らしいものにできるよう、そして夢を叶えるために、これからも歩んでいこうと思います。

最後になりますが、前に進むため背中を押してくれた両親、先生方、切磋琢磨しながら、ともに3年間を過ごした仲間へ心から感謝し、卒業生代表の言葉とさせていただきます。

## 研鑽は続く 式辞 校長 山口喜久枝

3年前の春、学校は突然賑わいを失う。朝のショートタイム、誰もいないクラスに教師たちは赴き、画面越しに君たちに呼びかけた。「今日は君の番だったよね。スピーチをお願いするよ。」本来なら、クラスで顔を見合わせながら、少し照れくささを隠しながら行ったかった取り組みであったろう。「少しでいいよ。みんな顔をだしてみようか。」全員の顔が映ることも難しく、私たちはオンラインに心載せて、君たちに日々の授業を送った。心はみんなに届いているのだろうか…まさに手探りの中での高校生活の始まりであった。

今、声を大にして君たちに伝えたい。私たちは何度も君たちの意欲に背中を押されてきた。

君たちの生活には常に「コロナ禍」の文字が付いて回り、数えきれないくらいの我慢を強いられた。しかし、君たちが下を向くことはなかった。文化祭・体育祭・それぞれの部活動の取り組みなど、限られた条件の中で常に新しいステージを求めて、その歩みを止めることはなかった。

今年度、四つの部活が全国大会に進出をした。連続31年間、総文祭に出場し続けた和太鼓部は全国制覇、さすがだ。同じく総文祭に出場した国際協力は小さな部活ながら、他校にはない視点をもった活動が注目を集めた。吹奏楽部も2年連続、日本管楽合奏コンクール全国大会に進出。表彰式に参加するのは、入学以来、初めてのことだった。そしてダンス部の全国大会進出。「強豪ぞろいだから優勝は難しい。でも何らかの賞は手に入れたい。」有言実行！審査員特別賞という成績を残した。そして、私たちの学校の部活動をけん引した野球部、サッカー部の諸君。苦しい戦いが続く中、それでも君たちは粘り強かった。後輩たちに大きな財産を残したはずだ。

卒業式の直前まで黙々と勉強を続けた君たちもいた。この闘いも部活動の全国大会進出に値する取り組みだ。粘り強く頑張れ！私たちはせめて暖かいスペースを用意し、君たちが求める時に、適切なサポートをする力を持った教師集団でありたい。ちょうど受験生のサポートをしていた頃、テレビではいつものように「カロリーメイト」のCMがよく流れた。受験をテーマにした作品であったので、君たちの姿とそれは重なった。バックミュージックはミセスグリーンアップルの『僕のこと』だった。その時の自分の悩みとも重なり、彼らの歌詞は胸に沁みた。うまくいくことも失敗することも、いいことも悪いことも、すべてを受け容れ、前に進む強さをもらった…そんな思いである。

若き日に、年をとれば悩みなど無くなると思っていた。あまりに浅はかで、情けない。人生の修業は生涯続く。若き人に励まされ、背中を押され、しかしながら自分も、時には他者の背中を押す人にならなければ長く生きてきた甲斐がないじゃないか。生きている限り、私たちの研鑽は続く。

「お前たちの前途が、どうぞ多難でありますように。多難であればあるほど、実りは大きいのだから。」小説家である壇一雄は自分の子どもたちにこんな言葉を贈った。私にはこんな言葉を贈る勇氣はとてもない。しかしながら、「人生において起こりうるあらゆることを受け止め、誠実に向き合え」という教えに重なる言葉であるとすれば、波乱万丈に生きたこの人であるが、父親としての滋味深い言葉である。「ためらうな。おそれるな。悲しみをも享受出来るほどのイノチを鍛冶して自分の人生に立ち向かっていくがよい。」

卒業、おめでとう。君たちにとって価値ある幸せがたくさんありますようにと心から祈ります。



### 今月の言葉 卒業生Tさん「あれこそが私にとって『ガチ進路相談』の時間だった」

卒業式の前日、「3年生を送る会」が開催されました。卒業生のTさんはこんな言葉を下級生に贈ります。「私は、保護者面談というイベントが大嫌いだった。なぜなら、そこでは必ず進路のことが話題になるからだ。」この面談の時間を彼女は「死の15分」と呼びます。ところが、この「死の15分」の後には、必ず友人たちが待ちかまえていてくれて、「どうだった？何言われた？」彼女は大人たちへの愚痴も含めていろいろなことを語り合ったと言います。気がつけば、このセリフを始めとして繰り返される時間が「ガチ進路相談」の時間となっていき、自分にとって「めちゃくちゃ大切な」時間になっていったと言います。やがて、彼女はこの「ガチ進路相談」での友人からの紹介により義肢装具士の方に出会い、それが彼女の進路開拓の目標となっていきました。彼女は最後に下級生に向けて、こう語りを締めくくりました。

「ぜひ友達とたくさん将来や進路、やりたい事などの話をしているいろんな考えや思いを共有しあってください。私のように友達が背中を押してくれる時もあれば、自分が友達の背中を押してあげられる時もあります。そしてたくさん悩んで、たくさん時間をかけて、自分の進路を見つけていってください。周りに惑わされて焦ることもあるかもしれませんが、自分のペースで大丈夫です。あなたの将来に繋がるきっかけはきっとあります。実りある高校生活にしてください。」

## 日本福祉大学国際福祉開発学部 Cambodia 研修—本校卒業生奮闘！

ちょうど皆さんが学年末試験を受けていたころ、日本福祉大学国際福祉開発学部の影戸先生が中心となり、学部の先生方と学生の皆さんがカンボジアを訪問しました。「GIGAと“ふくし”で開くカンボジアの教室」を探究課題とし、主に3年生の文理文系コース及びグローバル英語コースの生徒とともにカンボジアの小学生への学習支援に取り組んだ本校の君塚先生もこのフィールドワークに同行されました。目的は①自分たちの取り組みが現地の子どもたちの教育の質の向上にどのように役立っているのか、そのデータの収集と活動の振り返りを行う②この活動を支える現地の先生方とのつながりを深め、真に社会に貢献する活動へと探究の質を高めるための方法を模索することの2つです。



国際福祉開発学部に進学をした本校の卒業生である杉本光咲さんと花井政輝さんも同行し、現地の子どもたちとの交流などにおいてその力を発揮しました。二人は夏に開催されるWorld Youth Meeting(WYM)や本校が独自で主催しているGlobal Meetup(MG)においても、積極的に力を貸してくれています。私たち教員にとっては、卒業生が成長して大学で活躍する姿は何ともうれしいものです。今回も、国際支援のその場所で、彼らの活躍を間近に見ることができました。彼らにフィールドワークの感想を寄せてもらいましたので、紹介します。

私は国際協力に興味があり、カンボジアに来ました。私が学んだことは支援の仕方です。特に私が大切にしていることは「継続的に支援を行うこと」です。何か機材を寄付して終わりというのではなく、その機器の使い方を理解し、有効に活用できる力を持った人材を増やしていくための教育など、「やりっぱなしの支援」ではなく、「その国の未来を見通した支援」が大切だと感じました。今の時代にはインターネットがあるため、日本にいても支援をしていくことは可能です。活動を続ける中で、自分が、これから何ができるのかを具体的に考えていきたいと思っています。

国際福祉開発学部 花井政輝 (右写真 左端が花井さんです)



私は2月16日から28日までカンボジアのシェムリアップで「カンボジアにおける継続的な教育支援に向けて～子どもたちの学習姿勢に着目して～」というテーマで研修に参加しました。現地では複数の小学校へ訪れ、小学生やProvincial Teacher Training Center(PTTC)の卒業生と交流しました。ICT環境は、進んでいる学校と進んでいない学校の間に差がありました。また、小学生の中でも学力が高い子と低い子の差が見られました。カンボジアの小学生はとても明るく元気で笑顔が沢山見られました。私が教室へ入ると礼儀正しく挨拶をし、手を振ると笑顔で振りかえしてくれる子どもたちばかりでした。私が訪れた小学校は田舎の小学校ではないため、家業などで学校へ行けない子どもたちは見うけられませんでした。これからも、現地の先生方と連絡を取り合い、状況把握をしていきたいと考えています。

国際福祉開発学部 杉本光咲  
(カンボジアの子どもたちと一左から杉本さん、花井さん)

